

# サタデープログラム<sup>36th</sup> ニュース

講座番号：5 第2部(11:50~13:20)

## サタプロ始動期の東海生が語る

# AI時代、君たちはどう生きるか？

講師 古屋 星斗(Shoto Furuya)氏 (リクルートワークス研究所)



1986年、岐阜県多治見市生まれ。

東海中学・高校卒。一橋大学商学部→一橋大学大学院社会学研究科修了。

2011年経済産業省に入省。人材政策、投資ファンド創設、福島復興支援、成長戦略のプランニングに関わる。

2017年より現職。学生・若手社会人の就業に関する考えの変化などを検証し、これからのキャリアづくりの法則を研究する。

好きな言葉は、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」

## 東海生 & 一橋大学生のころ

サタプロの第4回(2003年)実行委員長だった古屋さんは、記念祭でも総務班で活躍しました。高校時代は、勉強よりサタプロや記念祭に燃え、よく職員室で先生方と議論をしたことがありました。

サタプロ実行委員時代は、ゲオを創業されたの結城社長や、ブラザー工業の安井社長といった経営者の講座、国会議員討論会の司会を行い、「日本のために何ができるか」、「食えて初めて社会に貢献できる」といった社長さんたちの言葉が今でも忘れられないそうです。

そんな中で、「経営者になりたい」と思い、高3から勉強して一橋大学商学部に進学。大学1年でベンチャー企業を作り起業するも、その企業がITバブルがはじけて破産！借金を背負った古屋さんはコンビニなどでバイトをして返済しました。

その経験から「お金じゃなくて世の中の本質を知りたい」と、教育社会学を勉強し大学院まで行きました。研究者になろうか就職しようか迷っていた時にリーマンショックが起き、パブリックな仕事も考えるようになり、国家一種試験を受けて経済産業省に入省しました。

## 経済産業省で～クールジャパンから被災地まで～

経済産業省ではクールジャパン戦略でアニメやゲームなど日本の文化を支援する投資ファンドを立ち上げることに。自分が作った投資ファンド設立法案の審議が国会で、全会一致で可決されるのを見て、「自分の仕事で社会が変わる」のを強く実感しました。

2013年11月に、福島被災者の生活支援チームに異動。過去、経済産業省は原発を主導しており、現地では加害者扱いでした。そんな中、仮設住宅を一軒一軒回り、住民たちの要望に応えようとコンビニやATMカーなどを被災地に持ってくる活動をしてきました。「人々の生活があって復興がある」「人がいて社会が成り立っていく」ということを知ったそうです。3年間の仕事の中で現場で活動することの楽しさを知りました。

その後、国家の成長戦略に関わるプランニングの部署に配属されましたが、「現場なき活動」に疑問を感じ始め原点回帰。「人間のキャリアを面白くする研究をしたい！」と、経済産業省を辞めることに！現在はリクルートワークス研究所にて学生・若手社会人のキャリア形成について研究するとともに、自身で社団法人を創設しキャリア支援の事業も行っています。

## 「偏差値が価値を失う時代」とは

もはや「偏差値の高い大学に行くことが幸せに繋がる」時代ではありません。2000年代まではいい大学に入ることはその後の人生に良い影響がありました。しかし、学歴の年収や幸福度に対する影響は若い世代では小さく、また、今や世界トップの授業がネットでだれでも受けられるようになっていきます。いい大学に行かなくてもいい教育が得られるのです。

大学の価値は、自分が決める。自分自身で自由に見つけることができるということです。

## 新しい世界に一步踏み出して

これからの時代、自分が好きなことに熱意を持って取り組むことが重要です。「好きでもないことをなんとなく」は「好きなことを全力で」に絶対勝てない。東海中・高校でも、ネットの情報で頭でっかちにならず、まずは自分ができる小さいことから始めて経験を積み重ね、自分だけの「好きなこと」を見つけていくことが大切なのです。

簡単に情報が手に入る今の時代だからこそ、本当に価値があるのは「自分の行った具体的な行動」。自分の経験にこそ価値があるのです。小さなことからでも、熱意を持って取り組めば、満足度の高いキラキラしたキャリアを積んでいけます。

## 当日の講座では

古屋さんの東海生時代や経済産業省でのお話、最新の研究からわかるこれから私たちは何をすべきなのかということをお話させていただきます。みなさん聞きに来てください！！

文責: 中学1C 吉田 悠一郎

プロジェクトXに出てきそうな秋葉原のかわいい個人オフィスにて

